京都府庁第2号館屋上緑化施設「京てらす」

源氏の庭

～源氏物語ゆかりの草花～

宇治市源氏物語ミュージアム所蔵『源氏絵鑑帖』より「夕霧」

目　次

◇あいさつ　1
◇「源氏の庭」の草花
なでしこ　2
ききょう　3
おみなえし　4
やぶかんぞう　5
ほおづき　6
べにばな　7
わらび　8
われもこう　9
ふじばかま　10
すすき　11
きく（野紺菊）　12
しおん　13
◇源氏物語と草花　14
◇源氏物語千年紀とは　15
◇源氏物語千年紀事業　15
◇「古典の日」宣言　16
◇「京てらす」の御案内　17

【本冊子の御利用にあたって】

「源氏物語」は、十一世紀初めに紫式部によって書かれた世界最古の長編小説といわれており、全編五十四帖から成り、最後の十帖は宇治が舞台であることから「宇治十帖」と呼ばれています。

本冊子では、物語の中に登場し、府庁第二号館屋上緑化施設「京てらす」に設けた「源氏の庭」に植えられている十二種の草花を、花を付ける時期の順に、左記の形式で御紹介しています。

草花の名前

和歌等　源氏物語の中で、その草花の名が詠まれた本文と出典の「巻名」

大意　本文の大まかな意味

草花の写真

解説　物語の背景などを含めた本文の内容の解説

草花の学名や分類、原産地、花期、特徴の説明

※源氏物語に登場する植物を掲載していますが、生育環境の変化や品種改良などで、当時のものとは形状等が異なっているものもありますので、御了承ください。なお、写真についても現代の園芸種を撮影しています。

あいさつ

「源氏物語」は世界最古の長編小説であり、卓越した文学作品であるだけでなく、文学、美術、工芸、芸能など、その後の日本が独自の文化を形成していく上で、もっとも重要な源泉のひとつとなっています。

「源氏物語」の存在が記録の上で確認されるとき（一〇〇八年十一月一日）から二〇〇八年で千年という大きな節目を迎えて、当時、有識者・文化人らの呼びかけにより、京都府、京都市をはじめ近隣府県や自治体、商工会議所などの諸団体、そして、文化庁までが参画する「源氏物語千年紀委員会」が設立され、「源氏物語」の再評価や内外への発信、後世への継承などを目的としたさまざまな催しを通じて、より多くの人々が、当時の日本人の感覚や美意識に触れ、「もののあはれ」という思想を感じ取ることで、心を問い直すきっかけとなりました。

また、二〇〇八年に開催された「源氏物語千年紀記念式典」において、古典に親しみ、古典を日本の誇りとして後世に伝えていくため、十一月一日を「古典の日」とする宣言がなされ、これをきっかけに、古典を顕彰する日本の記念日「古典の日（十一月一日）」が法制化されました。

京都府でも、多くの方々に「源氏物語」をはじめとする古典の魅力を発信し、古来の日本人の美意識に触れつつ、「もののあはれ」という山紫水明の都に生まれたこの大切な思想をいま一度学び直すきっかけとするため、府庁第二号館屋上緑化施設「京てらす」に、「源氏物語」にゆかりの十二種の草花を集めた花壇『源氏の庭』を整備しました。

京都御苑の鮮やかな緑を背景に当時の自然環境に思いを馳せ、京都とともに今を生き続ける素晴らしい文化を是非お楽しみください。

京都府知事　西脇　隆俊

なでしこ（別名・とこなつ）

咲き交じる色はいづれと分かねどもなほ常夏にしくものぞなき

二帖「帚木」から

［大意］

色とりどりに咲き交う花は皆美しくて、これが一番、あれが二番と分けることができない。（君も、君と僕の間の娘もどちらも大切だ。）でもやはり花は「とこなつ」…ひとつ床で愛し合った君がいちばんだ。

解説

光源氏の義兄にして悪友の頭中将が恋人に詠んだ歌。ナデシコは和歌では、「とこなつ」の名で呼ぶ時には「寝床」をかけて恋人を示し、「撫子」と呼ぶ時には「撫でる」をかけて幼子の意味で詠むことが多い。ちなみにこの恋人は後に光源氏と知り合う夕顔である。

和　名	ナデシコ（カワラナデシコ　河原撫子）	別　名	大和撫子、常夏
学　名	*Dianthus superbus var. longicalycinus*		
分　類	ナデシコ科ナデシコ属	原産地	日本
花　期	５～１０月		
特　徴	草丈が50～100㎝で秋の七草の一つ		

ききょう

これもいと心細き住まひのつれづれなれど、住みつきたる人々は、もの清げにをかしうしなして、垣穂に植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花、桔梗など咲き始めたるに

五十三帖「手習」から

［大意］

庵は宇治に似た侘び住まいだが、住む人の手によりこざっぱりと整えられており、庭の垣根に植えた撫子も見事で、女郎花、桔梗など秋の花が咲き初めていた。

解説

宇治十帖最後のヒロイン浮舟は横川の僧都一行に救われて、宇治を離れ比叡山麓・小野の僧庵に身を寄せる。本文は浮舟が見たその風景。山里の庭に秋の七草が映える。

和　名	キキョウ（桔梗）	別　名	キチコウ、蟻の火吹き、朝貌
学　名	*Platycodon grandiflorus*	分　類	キキョウ科キキョウ属
原産地	日本、朝鮮半島、中国	花　期	６～８月、９～１０月
特　徴	多湿を嫌い、乾燥を好む。日当たりの良い山野の草原に生育する。秋の七草の一つ。		

おみなえし

女郎花乱るる野辺に交じるとも露のあだ名を我にかけめや

五十二帖「蜻蛉」から

［大意］

女郎花の咲き乱れる野辺…女房方のあまた集うここに私が立ち入っても、どなたも私を好色などと言いはしないでしょう。私の真面目さをご存知ですからね。

解説

浮舟を失った後、薫と匂宮はそれぞれに喪失感を抱く。本文は、内心で憂いつつも女房（侍女）と如才なく応対する薫の歌。なお、女郎花は、和歌ではこのように女性をなぞらえて詠まれることがほとんどである。

和　名	オミナエシ（女郎花）	別　名	姫部志、アワバナ、ボンバナ
学　名	*Patrinia scabiosifolia*	分　類	スイカズラ科オミナエシ属
原産地	日本、朝鮮半島、中国	花　期	７～９月
特　徴	草丈60～100㎝。晩秋には地上部が枯れるが、春に根元から芽を伸ばす。悪臭がある。秋の七草の一つ。		

やぶかんぞう

薄鈍色の綾、中には萱草など澄みたる色を着て、いとささやかに、様体をかしく、今めきたる容貌に、髪は五重の扇を広げたるやうにこちたき末つきなり

五十三帖「手習」から

［大意］

薄鈍色の綾の表着を掛け、中には萱草色など地味な色のものを着て、たいそう小柄できれいな体つきをしているうえ、今風の顔立ちに、尼そぎに切りそろえた髪の裾が五重の扇を広げたように豊かだ。

解説

出家して尼になった浮舟の姿。ここでの「萱草」は衣服の色を言う。黒みを帯びた黄色で、喪服や尼衣に用いる。

和　名	ヤブカンゾウ（藪萱草）	別　名	忘れ草、忘憂草
学　名	*Hemerocallis fulva var. kwanso*	分　類	ツルボラン科ワスレグサ属
原産地	中国	花　期	７～８月
特　徴	草丈80～100㎝。日当たりの良い肥沃地を好む。		

ほおづき

酸漿（ほほづき）などいふめるやうにふくらかにて、髪の懸かれる隠々（ひまひま）、うつくしうおぼゆ

二十八帖「野分（のわき）」から

［大意］

酸漿とかいうもののようにふっくらとして、かかった髪の間から覗くお顔がかわいらしい。

解説

夕顔の娘・玉鬘（たまかづら）の笑顔の描写。肌の色や頬のあたりが実に美しかったという。なお、紫式部が仕えた中宮彰子も『栄華物語』で顔だちを酸漿にたとえられている。

和　名	ホオズキ（酸漿）	別　名	鬼灯、灯籠草、輝血
学　名	*Physalis alkekengi. var. franchetii*	分　類	ナス科ホオズキ属
原産地	東アジア	花　期	7～9月
特　徴	耐寒性がある。日当たりの良い少し湿った肥沃地を好む。		

べにばな（別名・すえつむはな）

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花（すえつむはな）を袖に触れけむ

六帖「末摘花（すえつむはな）」から

［大意］

心惹（ひ）かれる色という訳でもないのに、我ながらなんだってこの末摘花（紅花）…赤鼻さんと関わり合ってしまったのかな。

解説

光源氏が逢瀬（おうせ）の後初めて見た末摘花の顔は、長くて先の赤らんでいる鼻がたいそう特徴的だった。歌は光源氏が彼女を思い出しながら一人ごとのように詠んだもの。

和　名	ベニバナ（紅花）	別　名	末摘花、呉藍
学　名	*Carthamus tinctorius*	分　類	キク科ベニバナ属
原産地	地中海～中央アジア	花　期	7～9月
特　徴	草丈50～100㎝。奈良時代に渡来。日当たりの良い場所を好む。		

わらび

この春は誰にか見せむ亡き人のかたみに摘める峰の早蕨

四十八帖「早蕨」から

［大意］

今年の春は誰に見せればよいのでしょうか。お坊様が、亡きお父様を思い出すよすがにと摘んで下さった、宇治山の峰の早蕨。去年はお姉さまと見たけれど、今年はお姉様も亡くなって。

解説

宇治の八の宮と懇意だった僧は、八の宮のために毎年春先に蕨や土筆などを贈っていた。この年も変わらず贈られた蕨を見て、受け取った次女・中の君は、今は亡き父と姉とを偲ぶ。

和　名	ワラビ（蕨）	別　名	早蕨、蕨菜
学　名	*Pteridium aquilinum*	分　類	コバノイシカグマ科ワラビ属
原産地	日本などの温帯～熱帯地方		花は咲かない、若芽は５～６月頃
特　徴	草丈50～100㎝。日当たりの良い草原や林内に生育する。		

われもこう

老いを忘るる菊に、衰えゆく藤袴、ものげなき吾亦紅などは、いとすさまじき霜枯れのころほひまで思し捨てずなどわざとめきて、香に愛づる思ひをなむ、たてて好ましうおはしける

四十二帖「匂宮」から

［大意］

宮様の風流は、老いを忘れさせる菊はもちろん、しおれがちな藤袴や目立たない吾亦紅などを、おもしろくもない霜枯れの時期まで慈しむなど、ことさらに香りを堪能なさるものだった。

解説

宇治十帖の主人公・薫はかぐわしい体臭の持ち主だった。ここは、光源氏の孫・匂宮がそれに対抗して、殊更にかぐわしい花を育てる場面。

和　名	ワレモコウ（吾亦紅）	別　名	団子花、お歯黒花など
学　名	*Sanguisorba officinalis*	分　類	バラ科ワレモコウ属
原産地	ユーラシア大陸	花　期	８～10月
特　徴	草丈70～100㎝。日当たりの良い丘陵や山地の草原などに生育する。乾燥に弱い。根のまわりが早い。		

ふじばかま

同じ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかりも

三十帖「藤袴」から

［大意］

あなたと同じ野辺の露で萎れている藤袴…同じ祖母の死を悲しむ私に、どうぞお気持ちをかけてください。ほんの申し訳程度でも結構ですから。

解説

光源氏の息子・夕霧が、藤袴の花にことよせて玉鬘に詠んだ歌。花の色・紫が縁を意味したことを利用し、従姉弟同士の親しいつきあいを願い出たもの。

和　名	フジバカマ（藤袴）	別　名	蘭草、香水蘭
学　名	*Eupatorium japonicum*	分　類	キク科ヒヨドリバナ属
原産地	中国	花　期	８～10月
特　徴	奈良時代に中国より渡来。川べり、土手などに生育する。秋の七草の一つ。		

すすき

前栽どもなど、小さき木どもなりしも、いと繁き蔭となり、一叢薄も心にまかせて乱れたりける、繕はせたまふ

三十三帖「藤裏葉」から

［大意］

植え込みなど背の低い木だったのも生い茂る大木となり、一塊りの薄も伸び放題に乱れていたのを、手入れなさる。

解説

光源氏の息子・夕霧は従姉で幼馴染の雲居雁と結婚し、独立して家を構えた。住まいは二人が幼い頃を共に過ごした思い出の三条殿で、しばらく主がいなかったため荒れていた。

和　名	ススキ（薄）	別　名	芒、乎花、尾花、茅
学　名	*Miscanthus sinensis*	分　類	イネ科ススキ属
原産地	日本、朝鮮半島、中国	花　期	８～10月
特　徴	秋の七草の一つ。山野、川原、荒地に群生する。日当たりの良い乾燥地を好む。		

きく（野紺菊）

九月になりて、九日、綿覆ひたる菊を御覧じて、もろともにおき居し菊の朝露も一人袂にかかる秋かな

四十二帖「幻」から

［大意］

九月になって、九日、重陽の節句のために綿を乗せてある菊をご覧になって、

かつては二人で起居して、菊の花の上に綿を置き、長寿を祈って花の白露を集めたね。でもその露も今は、私一人の袂にかかる露…涙の露となってしまったこの秋だ。

解説

光源氏は五十一歳の時、三〇余年連れ添った妻・紫の上を喪い、嘆き悲しむ。不老長寿の効を持つとされる菊を見るにつけても、亡妻との昔のひと時が頭をよぎる。

和　名	ノコンギク（野紺菊）	別　名	野菊
学　名	*Aster microcephalus var. ovatus*	分　類	キク科シオン属
原産地	日本	花　期	８～11月
特　徴	草丈30～100㎝。日当たりのよい肥沃地を好む。湿地にも乾燥する岩場にも生育する。		

しおん

吹き来る風は、しをにことごとに匂ふ空も、香の香りも、触ればひたまへる御けはひにや

二十八帖「野分」から

［大意］

中宮がいらっしゃる方から吹いてくる風は、本来は香のない紫苑がいっせいに匂い立っているようなかぐわしい香りだ。それも中宮がお触れになったからだろうか。

解説

野分（台風）の翌日、光源氏の息子・夕霧は、六条院に住まう女性たちを順に見舞う。本文は光源氏の養女・秋好中宮の庭の様子。中宮は童女たちに秋の花を摘ませていた。

和　名	シオン（紫菀）	別　名	鬼醜草、鬼の師子草
学　名	*Aster tataricus*	分　類	キク科シオン属
原産地	朝鮮半島、中国	花　期	９～10月
特　徴	草丈１～２ｍ。水はけのよい土地を好む。乾燥を嫌う。半日陰でも育つ。		

『源氏物語と草花』

（本冊子監修者）京都先端科学大学教授　山本淳子

『源氏物語』には、草花が効果的に使われています。

それは一つには、人物を指す呼び名としてです。たとえば、「夕顔」。この花が光源氏と彼女の恋のきっかけとなったことからついた呼び名ですが、実際の花自体のはかなさが、「夕顔」という女性の性格や人生そのものを象徴していると言えます。また、夕顔の娘の「玉鬘（たまかづら）」。光源氏に和歌の中で「玉鬘」と呼ばれることからこの呼び名となりましたが、一度は遠い九州まで行きながら再び上京し母にゆかりの人と巡り合う、数奇にして力強い運命が、どこまでも伸びる蔓草（つるくさ）の名に表れています。

もちろん風景としても草花は効果的に描かれています。たとえば「賢木（さかき）」の巻、六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）と光源氏が今生の別れを覚悟する嵯峨野には、秋の花が萎（しお）れ草は枯れ、ただ荒涼とした風が渡っています。これらは皆和歌の世界で詠み継がれてきた景物なので、当時の読者たちはこの風景描写を読んだだけで、男女の悲しい別れという筋書きを察したことでしょう。ほかに、当時は衣裳の染め色の名や宮中の御殿の名などにも草花の名が使われることがありました。『源氏物語』ではそれらについても、色彩が持った意味や殿舎（でんしゃ）の位置づけなどがみなストーリーに活かされています。

『源氏物語』に現れる草花は、このようにそれぞれが意味を持っています。それを知って読めば、『源氏物語』を読むことは間違いなく数倍楽しくなることでしょう。

［監修者略歴］一九六〇年石川県金沢市生まれ。京都大学文学部卒業。石川県立図書館職員・石川県立高校教諭を経て、一九九九年、京都大学大学院人間・環境学研究科修了。京都大学博士（人間・環境学）。二〇〇三年、京都学園大学教員。二〇〇七年、『源氏物語の時代―一条天皇と后たちのものがたり―』（朝日新聞社）により、サントリー学芸賞（芸術・文学部門）受賞。二〇二四年四月から京都先端科学大学国際学術研究院教授

『源氏物語千年紀』とは

紫式部日記の寛弘五年（一〇〇八年）十一月一日の条に、「藤原公任（きんとう）が『あなかしこ。このわたりに、わかむらさきやさぶらふ（このあたりに若紫さんはおひかえでしょうか？）』と紫式部に尋ねたところ、『源氏にこるべき人も見えたまはぬに、・・・（源氏に似ていそうなほどの方もいらっしゃらないのに、・・・）』と思いながら聞いていた」と、「源氏物語」に関連する「若紫」や「源氏」という記述が見られ、当時すでに「源氏物語」が読まれていたことがうかがえることから、平成二十（二〇〇八）年を「源氏物語千年紀」ととらえています。

『源氏物語千年紀事業』

平成十八（二〇〇六）年十一月、当時の裏千家家元・千玄室氏や哲学者・梅原猛氏、作家・瀬戸内寂聴氏ら八人の文化人が、「源氏物語」が後世の文化に与えた影響の検証・再評価と千年紀事業の展開を国内外に「よびかけ」ました。

京都府では、「源氏物語」が宿す日本文化の美意識などをあらためて認識し、その奥深さや素晴らしさを広く発信するとともに、次世代に引き継ぐことをとおして、地域の活性化を図っていきたいとの思いから、平成二〇（二〇〇八）年に、京都市、宇治市、京都商工会議所など多くの関係団体と源氏物語千年紀委員会を設置して多彩な取組を進めました。

「古典の日」宣言

平成20年（2008年）11月1日
源氏物語千年紀よびかけ人
源氏物語千年紀委員会

『源氏物語』は日本の古典であり、世界の古典である。

一千年前、山紫水明の平安の都に生まれたこの作品は、文学はもとより美術、工芸、またさまざまの藝能に深い影響を及ぼし、日本人の美意識の絶えることない源泉となってきた。一九三〇年代に英訳されて以来、近年では二十余の外国語に翻訳されて、世界各地の人々に愛読され、感銘を与えている。

この物語について『紫式部日記』に記された日から数えて一千年。この源氏物語千年紀を言祝いで、私たちは、今後十一月一日を「古典の日」と呼ぼう。

古典とは何か。

風土と歴史に根ざしながら、時と所をこえてひろく享受されるもの。人間の叡智の結晶であり、人間性洞察の力とその表現の美しさによって、私たちの想いを深くし、心を豊かにしてくれるもの。いまも私たちの魂をゆさぶり、「人間とは何か、生きるとは何か」との永遠の問いに立ち返らせてくれるもの。それが古典である。

揺れ動く世界のうちにあるからこそ、私たちは、いま古典を学び、これをしっかりと心に抱き、これを私たちのよりどころとして、世界の人々とさらに深く心を通わせよう。

そのための新たな一歩を踏みだすことを、源氏物語千年紀にあたって、私たちはここに決意する。

紫のゆかり、ふたたび。

古典の日推進委員会・古典の日文化基金賞顕彰委員会

源氏物語千年紀委員会を承継し、平成20年（2008年）11月1日に宣言された古典の日について、その宣言の趣旨に沿った事業を展開するため、古典の日推進委員会が設置されました。平成24年9月5日に「古典の日に関する法律」が公布・施行されたことを踏まえ、法律の目的の実現のため、「古典の日フォーラム」や「古典の日文化基金賞」、「古典の日朗読コンテスト」、「街かど古典カフェ」などのさまざまな取組が行われています。

（古典の日　https://hellokcb.or.jp/kotennohi/home/about/）

『源氏の庭』について

京都府庁第2号館屋上緑化施設「京てらす」では、屋上緑化に適した草花を調査するための植栽試験エリアを設けていましたが、平成19年度末で試験が終了したことを機に、京都府農業総合研究所の技術協力を得て、同エリアを源氏物語の中に登場する植物のうちから屋上緑化に適した草花12種で植え替え、「源氏の庭」と命名し公開いたしました。

源氏物語に登場する植物は、草本類が約50種、木竹類が約60種の合計110種とされており、その多くは十二単などの色合いの表現にも使われています。

「京都府立植物園でみる源氏物語の植物」（京都府立植物園発行）から引用

京都府庁第2号館屋上緑化施設「京てらす」

地球温暖化対策のひとつとして、屋上緑化が都市のヒートアイランド現象の緩和や、都市環境の改善に効果があることを広く府民の皆さんに知っていただくため、その先導的モデルとして府庁第2号館の屋上（約600㎡）を緑化し、平成18年5月から公開しています。

＜公開＞
・月曜日から金曜日まで（土曜日、日曜日、休日および祝日は除く。）
・9時～16時半（ただし、11月から2月までは、16時閉場）

＜見学＞
公開時間内に自由に見学ができます。（無料）
なお、説明を希望される場合は事前に京都府自然環境保全課までお申し込みください。
（TEL 075-414-4706）

＜概要＞
・平成16年度に「緑の府庁づくりコンテスト」を実施し、府民の皆さまからの提案を取り入れて芝生広場等を整備
・環境学習の場として、緑化面とコンクリート面との温度差を示す「温度パネル」や、屋上緑化技法などの「展示パネル」、雨水を花壇の散水に利用するための「雨水タンク」を設置

京都府庁第2号館屋上緑化施設「京てらす」

源氏の庭 ～源氏物語ゆかりの草花～

京都府庁へのアクセス

■京都駅から　市営地下鉄烏丸線「丸太町」下車

■JR二条駅から　市営地下鉄東西線乗車、「烏丸御池」で烏丸線に乗換え、「丸太町」下車
※地下鉄「丸太町」から徒歩10分

■三条京阪から　市バス10系統

■京阪丸太町から　市バス93、202、204系統
※「文化庁前・府庁前」下車徒歩５分

見学にお越しの際は、公共交通機関を御利用ください。

2008年6月発行、2025年3月第2版

監修／山本淳子（京都先端科学大学教授）

協力／京都府農業総合研究所、京都府立植物園

企画／京都府自然環境保全課

〒602-8570　京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町

電話番号：075-414-4706　ファックス：075-414-4705

メール：shizen-kankyo@pref.kyoto.lg.jp